
俺が知らないこの世界

東条 優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺が知らないこの世界

【Nコード】

N2574N

【作者名】

東条 優

【あらすじ】

一般的な高校生活を送っていた俺こと実神楽悠斗はひょんなことに巻き込まれ死ぬはずだった。だが、死を覚悟した俺の下に、突然、「生きたい?」という可愛らしい女の子の声が聞こえた。その問いに「生きたい。」と返したその瞬間から、『守護者』と呼ばれる者達との戦いに巻き込まれることとなり……。

第1話「天使か、それとも死神か」

昼だというのに外は暗い。

明かりをもたらすはずの太陽は、黒い雲に覆われ、地面へと大量の雨粒が叩きつけられている。

時折聞こえる、ゴロゴロという音と共に、雨は一掃激しさを増す。遠くからは蛙のゲコ、ゲコという鳴き声が聞こえてきていた。

そんな中、ある廃ビルの屋上に、傘もささず、全身ずぶ濡れの少年がいた。

漆黒の髪の毛先には雨粒が出来ていた。その少年はこの近くにある高校の制服を着ている。

だがその少年はある一点を見ていた。見ていたというよりも睨みつけていた。そこから声がした。

「チョロチョロと逃げやがって・・・。」

少年の睨みつける先には、不良たちがいた。その数5人。

「・・・くそつ。」

後ろへ後ずさる少年。だが、後、数歩下がれば屋上から落ちてしまふという危機的状況である。

どんどん近づいてくる不良達。

そもそもこうなった理由は10分前に遡る。

いつものように学校の授業も終わり、少年が帰っていたときのことだ。

この辺では、有名な不良グループに1人の金髪ツインテールの少女が絡まれていた。

だが、ここで自分から助けるなんてことはしないと少年は思っていた。

自分の身が危険に晒されるなんて御免だと思い、正義の味方ではないのだからと、言い訳を並べている少年の耳にとんでもない一言が入ってきた。

「あそこにいるヤツが、君達の悪口を言っていましたよ。」

その少女は少年を指差し、何の違和感も無く言い放ったのだ。もちろん絡まれていた少女と少年には何の関係も無く、まして少年はそんなことなど言っていない。

つまり、少女による嘘なのだが、その言葉に単細胞な不良たちの敵意が少年に移っていく。

案の定、少年は不良たちに追いかけられ、廃ビルに逃げ込み、今に至るのだった。

ついに追い詰められた少年と、その少年を囲むように不良たちが距離を詰めてくる。

不良が少年を殴ろうとしたその時、

「あつ……。」

反射的にかわそうと身を引いたのがいけなかった。

足を一步後ろにずらしたその時、もうすでに、足場が無い状況にまで追い込まれていたことに気づいていなかったのが運のつきだった。

体が後ろに傾いて、そのまま少年は屋上から落ちた。

「やっと見つけた。」

その光景を近くの民家の屋根の上から見ている少女がいた。
茶髪のポニーテールで、その整った顔を見れば誰もが虜になると思
われる美少女がそこにいた。

だが、その少女は異質だった。

その異質たる原因は、その手が握っている物にあった。
死神の鎌を連想するような大鎌が握られていたのだ。

「今こそ、約束を守るとき、だよな？」

少女は何も無い虚空に向かって、確かめるように呟く。

「助けてあげないと。」

少女は一言そう言っ、その場から姿を消した。

少年は落下していた。下はコンクリート。

確実に死ぬな、少年は絶対に揺るがないであろう未来に絶望するで
もなく、自分の運命を呪うでもなく、淡々と死を受け入れようとし
ていた・・・その時、

『おい、大丈夫？』

どこからか明るい女の声がした。

落下しながらあたりを見渡すがどこにも姿が見えない。

『ねえ、君。生きたい？』

女が言ってくる。

『私は君を生かすことが出来るんだよ。ただし、君が持つ『全て』
を奪うことになるけど、それでも良い？』

しばしの沈黙。

だが、少年は力強く言った。

「生きたい。」

『契約完了♪』

女の楽しいな声と共に、視界には大鎌が現れ、それが自分の体をすり抜けるのと同時に、少年の意識が無くなった。

その少年の名は実神楽悠斗^{みかぐら ゆうと}という極普通の高校生・・・であったが、今この瞬間から、彼は人の世から完全に逸脱してしまった『人間だった何か』、言い換えるなら『化物』へと変わった。

第1話「天使か、それとも死神か」（後書き）

いかがでしたか？

気軽に感想・アドバイスお書きください。

次回もお楽しみに。

第2話「人間を喰う者」

「うう……。」

目が覚めると、頭がズキズキするが、そんなことより自分の様子を見る。

体のどこにも怪我一つしていない。

周りを見渡すが、一面お花畑が広がっていた。

ああ、これが天国ってヤツか。よく死んだらお花畑が見えるとか言うが、本当だったとは。

「……。って俺は死んだんだよな。」

改めて思い出してみる。確か変な女のせいで不良に追いかけて、拳銃の果てに屋上から飛び降りちまって……。あれ、その後、に何かあったような。

「ねえ、」

何があっただんだっけ？ 思い出せない。

「ねえってば！」

何か声が聞こえてくるんだけど。女の人の。どこかで聞いたような……。。

「いい加減、気づいてよ！！」

ドンつと後頭部に激痛が走る。思い出したぞ。この声は確か、落下中に聞こえた声だ。

生きたいのか？ とか契約がどうこうって言ってたような気が。

それよりも後ろを振り向かないと。

振り向くとそこには、可愛い女の子がいた。多分、今まで出会った

女性の中で一番可愛いと思う。

茶髪のポニーテールは少女が動かたびにゆさゆさと揺れ、整った顔立ちはどこかのお姫様を思わせる。

少女の着ている白いワンピースが背景の花畑と合っていて、凄く良い。

胸も見た感じBぐらいだと思う。

だが、ただ一つこの場に似合わないものが合った。

彼女の握っている物騒な大鎌。それはまるで死神の鎌を連想させるような禍々しい感じだ。

「・・・その鎌は？」

物騒なので聞いてみる。人殺しの道具じゃないよね。

「この鎌はね、『吸入鎌』ヒューサイズっていうんだよ。」

なんだそりゃ？聞いたことが無い。

困惑している俺を見て、少女は、

「君は・・・いや、君って言うのは言いにくいんだよねえ。名前、

何ていうの？私の名前は花月風香かげつふうかだよ。風香って呼んでね。」

と笑みを浮かべ、自己紹介してきた。

「俺は実神楽悠斗みかぐら ゆうとだ。それよりも俺は死んだのか？生きてるのか？」

「実神楽悠斗・・・じゃあ、ゆう君だ。」

変なあだ名をつけられた。

「ゆう君は死んではないよ。でも人間として生きているわけでもない。」

俺の質問に、意味の分からない答えが返ってくる。俺は死んでいないが生きているわけでもないらしい。

「どういうことだ？」

「ゆー君はね、落下した時に本当は死ぬはずだったの。でも私が助けてあげた。君の人間としての全てを奪う代わりにね。」

「どうやって？」

「この鎌だよ。」

風香が『吸人鎌』とかいう大鎌を見せてくる。

「この鎌はね、人間にのみ効力を発揮する道具なんだ。その人の記憶、周囲との関係、運動能力、年齢、体重や身長、魂とか、とにかく人間に関することなら奪うことが出来るの。」

「俺は何を奪われたんだ？」

「魂以外の全てだよ。」

風香は隠そうともせずにストレートに言った。

だが俺の身長も体重も無くなっていない。俺の記憶も無くなっていない。

そのことを言うと、風香は、

「ゆー君の体は私が再構成してあげたの。記憶の方は、最低限のこ
と以外は奪っているよ。そうだねえ、昨日の晩御飯を思い出してみ
てよ。学校の先生の名前は？」

と胸を張って言い、その後俺に顔を近づけてきた。

昨日の晩御飯・・・思い出せない。学校の先生の名前・・・思い出
せない。

「・・・。」

「思い出せないでしょ？」

コクリと頷く俺。そんな俺の様子を見て、クスクスと笑い始めた風
香。

「元に戻すことは出来ないからね。美味しく頂いちゃったし。」

元に戻せないことは受け入れられる。よくアニメとかでもこういう
こついうことはあるからな。

「美味しく頂いた・・・？」

「うん、久しぶりに人間のほとんどを食べてもう満足だよ。」

「食べた？」

「うん、ゆー君、信じてないでしょ。だったら論より証拠。着いて来て。」

そう言うのと、風香は俺の手を掴み、引っ張り始めた。

約10分ほど歩き、連れて来られたのは商店街。

意識を失っていたのか、時刻はお昼過ぎになっており、人通りも多い。

今は雨は降っておらず、太陽が輝いていた。

「じゃあ見ててね。」

風子は手に大鎌を持ち、ゆっくりと道の真ん中に行き、立ち止まった。

人混みにぶつかってもおかしくないのだが、風香を避けるように、歩く人々。

チラリと彼女を見る人々だが、すぐに興味を無くしていた。

その光景は俺にとっては理解しがたい物だった。

普通なら叫び声が起こってもおかしくないのだが、何も起こらない。風香の手に持っている大鎌を見ても。

風香には気づいているが、誰一人として、大鎌の存在には気がついていない様だった。

風香は大鎌を振り上げ、そして、

「やめろっ！！」

俺の制止の言葉を見せず、歩いてくる人混みの中の一人の中年の男目掛け、風香が大鎌を右から、左へ振り、男の体は真っ二つに・・・

……成らずに擦り抜けていった。

男の体が無事なようで安堵する俺。
その時、異変が起こった。男の体から火の玉のようなものが飛び出したのだ。

それは上空に舞い揺ら揺らと風香の手の上に落ちてきた。

その光景に気づかない人々。またその男も何事も無かったように歩みを進める。

「その火の玉、何なんだ？」

風香の側に行き、尋ねる。すると風香はあまり人のいない裏路地へ入ると、

「これはね、あの人の記憶だよ。」

と、火の玉を前に出し言った。

「記憶？」

「そう。これはあの人が子供の頃の記憶を少し奪ったんだよ。」

勝手に人の記憶を奪う！？そんなこと許されるのか？

だが、風香は悪びれた様子も無く無邪気な笑顔で言う。

「……奪ってどうするんだよ？」

「食べるんだよ。」

そう言つて、風香は葛餅くずもちを食べるように、火の玉を口に入れて、飲み込んだ。

「これで私の言ったことが本当って分かるでしょ？」

「ああ、納得した。」

胸を張ってくる風香。

「ゆー君も『こっち側』だから、後々、同じことをやることになるんだよ。」

今なんて？俺も風香側？同じことって火の玉を食べるってことか？
困惑している俺の表情を見ていたのか風香は、

「最初に言っただしょ。ゆー君は人間としては生きていないって。
つまり、私達と同じ『化物』なんだよ。あつ、あの時、屋上から落
下してた時に契約完了しちゃってるから、元に戻すことは不可能な
んだよ。」

と子供に言い聞かせるように言った。

俺が化物に……。元には戻らない……。

その言葉が何度も頭の中を駆け巡る。

「そんな証拠でもあるのかよ！？」

俺は咄嗟に目の前の現実から逃げようと言った。

「証拠ねえ……。うーん。まだどうしようもないんだよね。」

風香は困ったような顔をして言う。

証拠なんて無いじゃないか。きっとこれは何かの間違いだ。

早く家に帰ろう。そしたらいつもどおりの生活が待っている筈だ。

家に帰るため足を動かす。背後から「待って。」という風香の声が
聞こえたが無視して歩き始めた。

第2話「人間を喰う者」(後書き)

いかがでしたか？

気軽に感想、アドバイスをお書きください。

次回もお楽しみに。

第3話「守護者」

「ただいま。」

風香を無視して家に帰って来た俺。玄関で靴を脱ぎ、リビングを覗くと、誰も居なかった。時計を見てみると午後3時になったばかりである。

母親は仕事に、妹は中学校に行っている頃だろう。ちなみに父親はいない。俺が産まれると同時に死んでしまったらしい。

2階にある自分の部屋へ向かう。

ドアノブに手を掛け、ドアを開ける。

いつも通りの部屋、少し散らかっている机、たくさんの本がある本棚、それらがある・・・

「・・・っ!？」

はずなのに、部屋には何も無い空間が広がっていた。

昨日の朝まではいつも通り合ったはずなのに。

「ただいまぁ。」

母さんが帰って来たようだ。

急いで下に降りながら、

「母さん、俺の部屋どうな・・・って・・・。」

「どちら様ですか?」

俺の言葉は母さんの言葉で遮られた。

どんな冗談だよ。俺はあんたの息子だぞ。

だが母さんの表情はまるで不審者を見る様な感じだった。

「警察を呼びますよ。」

玄関に母さんの声が響く。

その時、玄関のドアが勢い良く開かれた。

「・・・遅かったみたいだね。」

「そのようですね。」

そこには風香と俺が不良に追いかけられる元凶となった金髪ツインテールの少女がいた。

「おま・・・っ!!」

俺の声は、ずかずかと中に入ってきたツインテール女が口を手で塞いで来たため遮られる。

「急いで!!」

「分かってるって。」

ツインテール女の声に風香が反応し、手に持った大鎌を母さん目掛けて振った。

斬られた瞬間、母さんは意識を失ったように倒れた。

呆氣にとられる俺をよそに2人は手際よく母さんをリビングのソファに寝かせ、俺の右手を風香が、俺の左手をツインテール女が掴み、

「ゆー君、行こっ。」

「何ボケツとしてるの？行きますわよ。」

彼女らに連れられ、俺は家を飛び出した。

暫く歩き、人通りも少ない裏道に入ると、2人は走るのをやめた。

そして、俺のほうを振り向き、言った。

「ゆー君、ごめんね。ショックだったよね？」

「風香、いいですね。こんな人間のクズみたいなヤツに謝る必要なんて無いですわ。それにコイツは私の可愛い風香の待つて、っていうお願いを無視するなんて万死に値します。」

申し訳なさそうに謝る風香と、その横から暴言を吐きまくるツインテール女。

「大丈夫だ。それに風香が助けに来てくて助かったよ。それよりもおい、そのツインテール女。」

「何か用ですの？それに私はツインテール女じゃなくてアリス・セイルストンって名前があるのですわよ。」

俺が指差すと、ツインテール女もといアリスはイライラを隠すことない表情でこつちを見てきた。

「よくもあの時はやってくれたなあ。不良を俺に押し付けたじゃねえか。」

「あの時の男でしたか。」

今、思い出した様子のアリス。

「知り合いなの？」

「ええ、こいつつたら女の子がピンチなのに見てみぬ振りをしようとした最低人間ですわ。」

アリスの言っていることは本当のことだけに、精神的にキツイ。

「そんなことより、風香、ちゃんとこのクズに説明してあげないといけない事があるんでしょつ。」

アリスはビルの壁にもたれかかり、腕を組んで言った。

「あの時のお母さんの反応はね、契約のせいなの。ゆー君は死ななために、魂以外の全てを捨てた。それによって、『存在していなかった』ことになってるんだよ。」

存在していなかった、だから俺の母親は俺のことを知らなかった。

俺の部屋が無くなっていったということか。

「だからね、ゆー君の友達とかも忘れていると思うんだよ。」

「じゃあ、俺はこれからどうすればいいんだよ！？」

「私達に着いて来てもらいますわ。その方があなたも得策かと存じますわよ。」

風香は肩に大鎌を担ぎ、アリスは不敵な笑みを浮かべて言う。

「得策・・・？」

「ええ、あなたはもう人間ではないのですよ。つまり・・・おっともう来たようですわね。」

「ゆー君、逃げる準備をしてね。」

俺を守るように風香は前に立ち、アリスは手のひらから火の玉を出現させ始めた。

彼女達が見上げる先、5階建てのマンションの屋上からこちらを見ている姿があった。

背の高さは180cmぐらいで、手には大きな剣を持っていた。学生服を着ており、顔には骨で出来た仮面のようなものをつけている。

暫くこちらを見つめ、仮面野郎は何の前触れも無く、屋上から飛び降りた。

加速しながら落下し、地面に当たる直前、一回転し、こちらへ向かってきた。

一瞬で間合いを詰められ、ヤツの刃先が俺の心臓に突き刺さる寸前、
「はあっ！！！」

金属同士がぶつかる音が鳴り響き、俺の心臓を庇うように大鎌が大剣を受け止めていた。

それと同時に、無数の火の玉が、仮面野郎目掛けて飛んできた。

仮面野郎はすぐさま後ろへ飛びずさり、火の玉は先ほどまで仮面野郎がいた地面を焼く。

「まだですわ！！！」

その声と共に龍の形をした炎が、アリスの手から仮面野郎の下へ突っ込んでいく。

仮面野郎は宙へ飛んで避けようとするが、

「残念でした」

その先には風香が待ち構えており、横から上半身と下半身を真つ二つに切り裂いた。

持っていた大剣が手から滑り落ち、地面に刺さり、遅れて仮面野郎の体がコンクリートの地面に叩きつけられる。さらにそこへ龍の形をした炎をが突っ込み、体が炎に包まれる。

「これで暫くは追ってこないはずですわ。」

「そうだね、移動しようよ。」

あたりに異臭が立ち始める中、俺たちは近くの喫茶店へ向った。

「アイスコーヒー二つとチョコパフェ一つお願いします。」

店員さんに注文し、話は本題に入った。

「さっきのヤツは何なんだ？」

「『^{ガーディアン}守護者』と私達は呼んでいますわ。」

「『守護者』？じゃあ何であいつらは俺たちを襲ってきたんだよ？」

そういったとき、注文したアイスコーヒーとチョコパフェを持ってきた店員さんがやってきたので話が一旦途切れる。

風香はチョコパフェを一口食べると、

「私達を消すためなんだよ。ゆー君は私達側になったって言ったよね。つまり私達も『存在していなかった』ってことになってるんだよ。」

と言って、また一口食べる。

「だけど、世界は、否、神様はそんな私達を許さなかったんだよ。」

本当は『存在しなかった者』が『存在している』、つまりイレギュラーなことが起きてしまったんだね。その場合、ゆー君なら元に戻すためにどうする？」

風香がスプーンをこちらに向け、返答を促してくれる。アイスコーヒーを飲み、少し考えて、

「・・・イレギュラーなことの原因となったのを消すだろうな。」と俺が言くと、風香は「その通り。」と言った。

「神様は私達を消すために『守護者』を創り出し、世界中に放ったんだよ。」

「『守護者』は焼かれようが斬られようが、時間がたつとまた復活しますわ。要するに、不死身なんですわ。」

風香のチョコパフェを横から食べたアリスが言った。

「ですが、『守護者』もまた、『存在しなかった者』を消すための『存在しない者』に変わりありませんわ。つまり彼らは私達を殺すと、殺した『守護者』も一緒に死んでしまいますわ。死ぬというより消えてなくなるといった方が正しいですわね。これは確認済みですわよ。」

そして風香はチョコパフェを食べ終わると言った。

「私達は一つの仮説を立てたんだよ。それはね、私達の人数分、『守護者』が用意されてるんじゃないかってね。私達が全員、死んだ時、『守護者』もいなくなり、世界は元の状態に戻るんじゃないかってね。」

そして、暫く間を空けて風香が口を開いた。

「そこで、ゆー君に協力してもらいたいんだよ。」

第4話「ギルド」

「俺に協力して欲しい？何を？」

アイスコーヒーを飲み干し、言った。

「あなたには、『守護者』^{ガーディアン}を殺してもらいますわ。」

金髪ツインテールのアリスが腕を組んでさりとらった。

「殺してくれだど？俺は武器なんて持ってないんだぞ。それにそれ以外は不死身なんだろ？殺せるわけ無いじゃないか。」

「そこは心配御無用だよ。ゆう君は『守護者』を殺せる。そうできるように私が契約に組み込んだからね。」

茶髪の髪をポニーテールにしている風香がニコニコ笑顔で話し始めた。

「ゆう君は武器を持っているよ。だけどそれをまだ具現化できていないだけ。だからそれを私達がお手伝いしてあげる。ゆう君は私達の希望だからね。」

「待て待て、他にも俺みたいなのやつはいないのか。風香側は他にもいるんだろ？それに俺じゃないといけないのか？」

俺は生憎こんな面倒そうなことに関わるのは御免だ。

それに武器とかそんなもの扱った事もない。

「あなただけしかいないわ。確かに私達みたいなのはこの世界に何百人っているけど、対『守護者』用の契約が出来るのはここにいる風香だけよ。それに、契約は1度しかできないんですわよ。」

「それにゆう君じゃないといけないよ。これは約束だからね。」

2人は意地でも俺をこのことに関わらせるつもりだ。

「約束って何のこ．．．。」

「別にゆー君がこのまま関わらないでおこう何て思つてると、すぐに消されちゃうよ。ゆー君も『存在しなかった者』なんだから『守護者』の標的になりかねないんだよ。それでもゆー君は私達から離れるの?」

上目遣いでこちらを見てくる風香。うう、可愛すぎだ。

「分かったよ。協力する。」

乗りかかった船だ。こうなったら最後まで付き合つてやる。

「ありがとう。」

あまりに嬉しかったのか、喫茶店には数名の人がいたのに、そんなのお構い無しといった様子で風香が抱きついてきた。正面から抱きつかれたので、風香の柔らかいものが当たってきた。

「これはお礼ね。」

風香は席に座っていた俺の頬に手を当てると、顔を近づけてきた。

その直後、俺の唇に柔らかい何かが触れた。

風香の顔が離れていく。今はキスだよな。そう思ったら、顔が真っ赤になっていく。風香も同じようにほんのり頬を赤く染めている。

そんな俺たちの様子を見ていたアリスの顔が鬼のような形相へと変わっていく。

「あ、あ、あなたという人は、わ、私の大事な風香に．．．許しませんわ。」

怒り爆発のアリスを落ち着かせるのに、結構な時間をとったのは言うまでも無い。

その後、俺たちは喫茶店を後にし、風香たちに着いて行った。歩きながら『守護者』のこと、風香たちのことについていろいろ教えてもらった。

まず『守護者』は学生服を着ており、顔には骨で出来た仮面を被っているということ。

また、『守護者』にも性別があるが、どちらも戦闘力は強いということ。

能力や武器は『守護者』も風香たち『存在しない者』もそれぞれ違うということ。

逆に、風香側は全て、女性らしい。

風香のように武器を使って戦う者もいれば、アリスのように炎などを出して戦う者、また戦闘向きではない能力を持っている者など能力は様々らしい。

現在は2人以上で行動しており、『守護者』の攻撃から逃げながら生活しているとのことだ。

また、『守護者』は不死身だが、回復するのに時間が掛かるらしい。だが、風香達は人間レベルの回復力しかないとのことだ。

「で、どこへ行くんだ？」

「日本支部の『ギルド』だよ。」

『ギルド』・・・？

「『ギルド』っていうのはね、私達の情報交換の場みたいなものなんだよ。」

風香が説明してくれた。更に『ギルド』は世界各地にあり、本部はイギリスのロンドンにあるという。

各支部には常時4、5名の風香たちみたいなのがいるという。

「着きましたわ。」

歩いていたアリスが立ち止まりいった。

前を見るとそこには、豪邸があった。ヨーロッパにありそうな感じ

だ。

「こんなに豪華だと逆に目立つんじゃないか？」

「そこは心配御無用ですわ。『ギルド』には結界が張ってあって、一般人にはもちろん、『守護者』も気づくことは容易ではありませんわ。」

中に入ると、大きなシャンデリアがあり、奥には大きな扉があった。入り口から扉までの壁際に、高そうなつばや額縁に入った絵、銅像などが置かれている。

真っ直ぐに扉まで向かい、大きな扉を風香が片手で開けた。

ドアに手を当てたが結構固く、かなりの重量がある。それを片手で開けるほどの力を彼女達は持っているということだ。改めて彼女達は人間ではないと実感させられる。

部屋の中は、書斎のようになっており、見上げるほど高い本棚には大量の本が置かれている。

漫画やラノベから、神話や古典などの分厚い本まで種類は様々である。

そんな本棚を背に、高そうな椅子に座って書類の整理をしている女性がいた。

黒髪は肩の辺りまで伸びていて、黒縁眼鏡をかけた知的な女性である。

「連れて来ましたわよ。」

アリスの声に、女性は顔を上げる。

「彼が・・・例の『異質な一族』なのですか？」

異質？ということだ？

「『異質』じゃないよ、咲姉。たった2人いただけだよ。」

風香が反論した。だがその言葉に咲と呼ばれた女性の目が鋭くなる。
「たった2人ではなく、2人もいたこと自体が問題なのです。それに、楓が彼を見たら・・・私達では手に負えなくなってしまうのです。」

何やら俺の知らない所で何か合ったみたいだ。

「そういえば楓さんはどうしたんですの？姿が見えませんか？」

アリスが部屋内を見渡しながら言った。

「楓なら地下に閉じ込めているのです。そこにいる彼の事は話してないのです。」

「なあ、さつきから名前の出ている楓さんってどんな奴なんだ？」

「楓ちゃんねえ、とつても可愛いんだよ。」

「何時も着物を着ている変わった子ですけどね。」

「ですが、かなりの強さなのです。」

話を聞く限り悪い奴ではなさそうだが、何故閉じ込めておく必要があるのか分からないままだった。

「それよりも、閉じ込めて置けるのはあと2、3日といった所です。その間に彼の能力開花を行うのです。」

「分かっているわ。」

話し合いが終わると同時に、風香に手を握られ武道場の様な所へ連れて行かれた。

「修行を始めようかな。」

「修行って何すればいいんだよ。」

目の前で小柄な少女が腕を組み、言った。

「ゆー君には『守護者』を殺せる力をあげただけど、その力の具

現化はまだ出来ていないんだよ。つまり、攻撃方法は自分で決められるってことなんだよ。」

「だからね、今から、それを決めてもらいたいんだ。」

「決めるってどうやって？」

「想像するんだよ。imagineだよ。例えば剣なら剣の形を想像する。アリスちゃんみたいな炎を出したいなら炎を想像する。それで第一段階は終了するんだよ。」

「じゃあ、修業開始ね。」

そう言っ大鎌の刃先を俺の足元の地面に差し込むと、地面が輝き出し、幾何学的な魔方陣が浮かび上がってきた。

「1分後に想像してたものがゆー君の能力になるからね。あと、能力の想像は一回きりだからよく考えて決めるんだよ。」

そう言った彼女の顔はこれから起こるであろうことが楽しみで、待ちきれないといったものだった。

第4話「ギルド」(後書き)

いかがでしたか？

気軽に感想、アドバイスお書きください。

次回もお楽しみに。

第5話「俺の能力」

「さあ、想像して。」

風香が言った。

自分の能力を創り出すため、考える。

どうせならかつこいい武器が良いな。ゲームとかで出てくる剣とか、エクスカリバーみたいなのか。

あ、でも炎とか風とかも良いなあ。

「あと30秒。」

でもやっぱり強い武器とかがいいな。敵を倒せるような。

「あと10秒。」

でも敵と戦うなら血とかダラダラになるな。うわっ、グロ。

ってなんで能力を考えるはずなのに血が……。

「終了!!!」

その声と共に、魔方陣の輝きがより一層増し、体中に何かが流れ込んでくるのが感じ取れた。

数秒後、魔方陣が消えていった。

「じゃあ、第二段階ね。次は能力の具現化だよ。ゆう君には今、契約の時にあげた力とたった今、想像してできた能力、いわば、力が水で能力が器みたいなものがあるんだよ。第二段階では、器に水を入れるように、能力に力を注ぎ込んでもらうからね。」

「やり方は簡単だから大丈夫だよ。力を込めて行くだけだから。一定の値にまで、力が溜まったら、自然と具現化されるからね。」
風香に言われた通り、力を込める。すると体中に何かが湧き上がって来ているものの、一向に具現化どころか、何も起こらない。

「何も起こらないけど……。」

「力は込めたの？」

「ああ、力は湧き上がって来る感じはするんだが……。」

その言葉を聞くと、風香は困った顔をして、黙り込んでしまった。
？

しばしの沈黙。だが、それを破るような声が武道場内に響いた。

「やはり、失敗に終わりましたか……。」

声のした方を見ると、武道場の入り口に黒髪を肩の辺りまで伸ばして、黒縁眼鏡をかけた、風香からは咲姉と呼ばれていた女性がそこにいた。

「だから『異質』だと言われているのです。」

「咲姉、待つてよ。まだ、失敗と決まった訳じゃないよ。幻術かもしれないし……。」

威圧感を放っている咲さんを前に風香が反論するが、徐々に声が弱々しいものになっていく。

「幻術の可能性は皆無です。そもそも幻術の場合は……。」

咲さんがなにやら幻術について語り始めた。話によると、幻術を使う場合には、周囲に力を放出させるらしいが、俺からはそれが感じられないため幻術の可能性は皆無らしい。

「……つまりは契約は無駄に終わったのです。よって、彼に利用価値は無いと判断し、彼を排除します。」

その言葉と共に、咲の手には氷で出来たタガーナイフの様なものが現れる。

「咲姉、駄目!!」

咲は風香の制止を無視し、タガーナイフを左手で掴み、俺との距離

を一気に詰めて来た。

そのまま心臓を刺される・・・

「なっ！！」

はずだった。刺される寸前、思わず目を瞑った。すぐに少しの痛みがはしったが、激痛とまではいかなかった。

目を開けると、驚きの表状をしている咲の顔が映った。彼女の見つめる先、つまりはタガーナイフの刃先はほんの少しだけ俺の皮膚を切り裂いていた。

だが、それ以上は深く刺すことはなかった。いや、刺せないでいた。何故なら、タガーナイフはいくつもの手によって掴まれていたからだ。

その手は血のように真っ赤であり、裂けた皮膚から生えてきていた。

咲さんは一生懸命タガーナイフを抜こうとするが、まったく抜ける気配が無い。諦めたのか手を放し、後ろに飛んでいった。

すると、手がナイフを放した。ナイフは床に落ち、床には赤い点々ができる。手は傷口の中に戻っていった。

傷口は相変わらず痛みもあり、血も流れているので回復するわけではなさそうだ。

「・・・、咲姉、あれはユー君の能力じゃないの？」

顔を真っ青にしていた風香が、ゆっくりと確認する様に声を出した。

「恐らくは、血を媒体とした能力、だと思われます。普通の時には、能力は発揮されていないので、傷を負った時に発動するようです。」
先ほどまでの威圧感はなく、今は落ち着いている様で、淡々と分析

しながら喋っていく。

「お話し中、悪いんだが俺は殺されるのだろうか？」

俺の言葉に二人は振り返り、咲さんは申し訳なさそうにし、風香は心配して近寄ってきた。

「殺そうとして申し訳ないです。お許してください。」

咲さんが頭を下げてきた。

「気にしないで良いよ。すぐに具現化されなかったせいだし、元はといえばあんな能力にした俺にも非があるし・・・。」

「まあまあ、二人とも自分を責めないで。」

頭を下げあっているのを止めたのは意外にも風香だった。

それでも咲さんは頭を下げていたが、暫くすると、頭を上げ、

「先程の様子からまだ能力はコントロール出来ていないようです。

なので其処を重点的に行って欲しいのです。」

それを言うと、武道場から立ち去ってしまった。

その後、能力をコントロールする修行を行い、ある程度コントロール出来るようになったが、相当時間を使い、日本支部の『ギルド』を出ていく日になった。

何故出て行かなければならないかと言うと、楓と呼ばれていた女性に原因があるらしい。

風香やアリスの話によると、普段は大人しい人なのだが、何故か俺を見ると、手におえなくなると風香達は推測している。

現在は地下に無理矢理閉じ込めてあるらしいのだが、もうすぐ出てくるらしい。

「今から何処へ向かうんだ？」

『ギルド』から出た所で、アリスと風香に聞いた。

「本部のイギリスへ行きたいのですが、生憎あそこは現在、『守護者』との戦争の真只中、貴方をそんな場所に連れて行くわけには行きませんわ。」

アリスの話によると、イギリスは大変なことになっているらしい。

だが一つ疑問に思った。

「戦争？」

彼女らの仲間は二人以上で行動し、『守護者』から逃げながら生活していると、風香達から聞いていた。もし、その通りなら戦争なんて起こる筈が無いだろう。

「ええ、戦争よ。私達と『守護者』との。」
アリスが話し始める。

戦争は本部の結界が破られたことから始まった。

結界を破ったのは『守護者』で、それもかなりの強者らしい。それが切っ掛けとなり、『守護者』達が集まりだし、本部を守るために各地から私達側も本部に集まった。

現在の戦況は五分五分であるらしい。

「・・・というわけですね。なので、私達はアメリカのニューヨークにある支部へ向かいますわ。」

アリスの声と共に、俺達は空港へ向かった。

そんな悠斗達の様子をギルドの二階の部屋の窓から見ている少女がいた。

赤髪は肩に触れるか触れないかぐらいの長さまでのびていて、二本のアホ毛が特徴的である。

ゴスロリ着物と呼ばれている着物を着ており、着物としての部分は桜の花びらが描かれた生地で、ゴスロリ独特の黒のフリフリスカーという目立つ格好である。

少女は悠斗達が移動し始めたのを見ると、後ろを振り返った。

少女の灼眼に映るのは、床に倒れている咲の姿。

少女は咲を一度見ると、視線を外し、天井を見て、口を動かす。

「やっと、やっと、見つけました・・・。」

少女は欲しかった物を手に入れた子供のように嬉しそうに言った。ゆっくりと、しかし確実に悠斗の元へ歩み始めた。

第5話「俺の能力」(後書き)

いかがでしたか？

気軽に感想、アドバイスお書きください。

次回もお楽しみに。

第6話「着物？な少女」

空港に無事に着き、一段落する俺達。

『ギルド』から空港まで約9kmの道のりを走り続けたが、余り疲れは感じられなかった。

その後、ニューヨーク行きの飛行機に乗った。

「それにしても、ファーストクラスなんて、よくそんなお金があったなあ。」

左隣に座っている風香に言う。

「お金なんて払ってないよ。コレでちょちょっとね。」

風香は笑顔で、大鎌を指差しながら話す。

「良いのかよ？金払わなくても。」

「いいのですわよ。私達はもともと『存在しなかった者』。社会のルールなんて当てはまりませんわ。それにそんなことにお金を使っていたらこちらが持ちませんわ。」

俺の右、通路を挟んだ向こう側の席に座っているアリスがコーラを飲み、言った。

「そんなもんか。」

「そついうものですね。」

そんな会話をしていると、何やら後ろの方が騒がしくなってきた。

「お客様、今から離陸しますので、お席にお戻りください。大変危険です。」

スチュワーデスさんの声が聞こえてきた。

「大丈夫だから気にしないで。つつとつとお。」

そんなスチュワーデスさんの声を無視している様子の凜とした女の人の声が聞こえてきた。

飛行機内が少し揺れると、よろけたのか体制を崩し、俺のほうに倒

れてきた。どうやら飛行機が動き出した様だ。

俺は慌てて席を立ち、お姫様抱っこをするような形で受け止めた。視界には鮮やかな赤が映ると同時に、甘い香りがした。

その少女はきれいな赤髪をしていて、華奢な体をしていた。

桜が描かれた着物とゴシッククロリータが混ざったような服装をしている、とにかく派手な格好をしている少女だった。

「大丈夫？」

「あ、ありがとう。」

少女はそういうと、手で顔にかかった髪を払い、その顔が露わになった。

整った顔立ちだが、まだ幼さが残っており、赤く輝く灼眼が俺の目を捉えていた。

「弥勒さま……弥勒様！！」
みろく

少女が満面の笑みを浮かべ、俺に抱きついてきた。弥勒って誰？

「楓ちゃん……！？」

「楓、あなたがどうしてここに！？」

すると、左右から驚きの声が上がった。

つて、楓っていったか。この子がみんなが言っていた子か。

確かに小動物のように可愛いし、着物（？）も着ている。

「アリスさんに、風香ちゃん、三日ぶりだねえ。元気してたの？」
俺に抱きついたままの状態で、俺の肩に顎を乗せ、二人に話しかける。

「元気になりましたけど……。あ、あなたは日本支部にいるはずでは？」

アリスが言葉を詰まらせながら言った。

「抜け出てきました。咲は抵抗しましたので、ちょっと大人し

くさせて貰いました。あ、ご心配無く。命までは奪ってませんからね。」

「そ、そうなんだ……。」

風香が安堵の声を上げる。そこは安堵するところなのか？

「そんなことよりも、風香ちゃん、アリスさん。この方が来られたら、わらわに一声かけてくれても良かったのではないか？」

その瞬間、周りの空気が凍りついた様な気がした。

その言葉は淡々と出ているが、ほんの少しの怒気を孕んだ様な声だった。

「そ、それは……そのお……。」

「なんといいですか……。」

二人が言葉を濁す。そんな様子を見て、楓はぷうつと頬を膨らませ、二人を睨みつけ、

「私だけ仲間外れとは酷いよお。それなら今からわらわがこの方を自由に使ってもいいよね。」

と言うと、俺を更に強く抱きしめてきた。

「駄目ですわ。」

「私達で護衛するように本部からも命令が来ているんだよ。」

「そんなこと、知ったこっちゃ無いです。いざとなれば本部ごと潰せばいいだけです。」

にはは、と笑いながら物騒なことを言う楓。冗談だと思っのだが、風香とアリスの顔が真っ青になっているのを見ると、どうやら冗談で済むような感じではないらしい。

「と、言うわけでちよつと借りるねえ。」

楓は抱きつくのをやめ、立ち上がり俺の手を掴むと、飛行機のドアを、『存在しなかった者』特有の馬鹿力で無理やり開け、空中にダンプした。

「うそおおおおおおお!!」

俺の叫びは、ビュービュー吹く風の音でかき消されていく。

「ちゃんと掴まっけていてくださいね。」

「掴まるってどこに!？」

かろうじて右手は彼女が掴んでおり、左手で彼女の肩にしがみついているが、今にも離れてしまいそうである。

「どこでも良いですよ。好きなように。」

好きなようにって……。でもどこかに掴まっけていないとこのままでは落っこちてしまう(今も落っこちているのだが)。なるべく女の子が、嫌がるような場所を避け、ウエストの辺りを掴む、というより抱くというような形で掴まった。

「あっ……。!!」

「あ、ごめん!!」

楓が声を上げたので、慌てて手を離そうとするが、

「いいですよ、気にしてないから。」

そう言つて、左手を俺の右手に重ねてくる。

「ちゃんと掴まっけてください。・・・“物質生成”!!」

その言葉と共に、海面が輝きだし、エアークッションの様なものが出現する。

「まだまだ……。!!」

さらにエアークッションが出現し、俺たちはそこに落下する。

ポワンッと跳ね返される。全然痛みは無かった。

「大丈夫!? 怪我はない?」

楓が近寄りながら尋ねてきた。

「平気、平気。それより君のほうこそ、怪我とかはなかった?」

「本当ですか、良かったです。」

安堵の声を漏らす楓。すぐに、困ったような顔になった。

「そ、そのお・・・お名前は？」

「ああ、まだ自己紹介していなかったか。俺の名前は実神楽悠斗だ。悠斗って呼んでくれ。」

「実神楽・・・実神楽、あ、はい悠斗様。わらは楓と言います。」
ぺこりとお辞儀をしてくる楓。そして、まじまじと俺の顔を見ている。

「やはり、弥勒様に似ていらしゃる。」

「なあ、楓。弥勒っていうのは誰なんだ？あ、別に答えたくないなら答えなくてもいいぞ。」

楓は少し顔を伏せたが、ゆっくりと、顔を上げた。そして、話し始めた。

一方その頃、飛行機にいた風香とアリスは焦っていた。

「どうしよう、どうしよう、ねえどうしよう？アリスう・・・。」

飛行機内は先ほど人が飛び降りたというのに、騒ぎになっていなかった。まるで、悠斗達など知らないといった感じた。

「ちよつとは落ち着きなさい。私達じゃあ、飛行機から飛び降りるだなんてことしたら、死んでしまいますわ。」

「とりあえずは周辺の各支部に連絡を。手の空いている者には搜索を手伝ってもらいましょう。私達はニューヨークに着き次第、支部にいるミユウに会いに行くわよ。」

アリスの指示に、頷きながら、早速連絡を取り始める風香。

風香たちの連絡手段は携帯電話ではなく、『存在しなかった者』の力を使って行うものなので、飛行機の中からでも連絡することが可能なのである。

一通り連絡を終え、座席に深く座る風香たち。

「それにしても、ゆー君大丈夫かなあ？」

「敵に襲われても、楓がいるので大丈夫だと思いますわ。彼女は何かといっても一人で、一国の軍隊や、大量の『守護者』達を捻り潰してきた猛者もへですわよ。最も、敵にすると同胞殺しまでやってのける厄介な存在ですけど今は私達の味方、多分ですけど。これほど心強いものはないですわ。」

2人を乗せる飛行機はまだ、ニューヨークに着く気配は無い。

第6話「着物？な少女」（後書き）

いかがでしたか？

気軽に感想、アドバイスを教えてください。

次回もお楽しみに。

第7話「最悪の場所」

「と、いうわけです。」

楓が弥勒という男について話し終えた。

詳しくは聞かせてもらえなかったが、話によると、弥勒とは遠い昔に楓が出会った男であり、強くないのに、強がって、助けを借りず、楓をからかったりするらしい。

話を聞くかぎり、根は良いやつなのではと思うのだが、楓は、わらわとの『約束』を破った馬鹿男だと言っている。

「そいつは生きてるのか？」

「もう死にました。」

顔を伏せ、震える声が返ってきた。

「幸せそうだったか？」

深く聞いてはいけないと思うのに言葉が勝手に出てくる。

「はい、幸せそうでした……。……悠斗様は変わっていらつしやいますね。普通、こんなこと聞きませんよ。」

ゆつくりと顔を上げながら言う楓。その顔には悲しみの色は無くなっていた。

「ごめん……。」「

「良いですよ。それに、この様なところも弥勒様に似ていらつしやる。今まで待った甲斐がありました。」

それから暫く無言になったが、楓が口を開いた。

「そろそろ移動しましょうか？」

周りを見渡すが島一つ無く、海が広がっている

。移動するといっても、船も無いし、どの方向に進んでいいかも分からない状態である。

「移動するってどうやって？」

「これを使うのです。“物質生成”！！」

楓の目の前に一艘の船が出現する。そして、彼女はにこりと笑い、船に乗った。

時は過ぎ、風香達はアメリカ、ニューヨーク支部に来ていた。

ニューヨーク支部は路地裏にあり、途中の道にはストリートチルドレンらの姿もちらほら見受けられる。

そんな彼らの縄張りともいえる場所に、とんでもなく豪華な家があった。

大きさは日本支部約三つ分はあるだろう。

だが、彼らはそれに気づく事はない。

何故なら支部を囲む様に結界が張ってあるからだ。

そんなニューヨーク支部の中では、悠斗らの搜索が行われていた。

「ミュウ、楓は見つかりましたか？」

「・・・ちよつと待て。今、搜してる。」

ミュウと呼ばれた少女が言った。

青髪の少女である。背は160cmぐらいで、黒いスーツを着ており、腰のあたりに二丁の拳銃が掛かってある。

ミュウは目を瞑り、額に指を当てている。

彼女の能力は他人の位置を検索する能力。ただし、一度会ったことがある『存在しなかった者』のみで、『守護者』の場所は検索不可能である。

「・・・見つけた。場所はハワイ島。」

何の感情も込めずに、淡々と言う。

「そ、そんな・・・。」

「寄りにもよって、ハワイですって・・・。」

だが、風香とアリスは、しまった、と言う顔をしている。

「・・・ハワイはイギリスでの戦争で捕まえた『守護者』達を送った場所。・・・危険。」

相変わらず声色一つ変えずに言った。

南の島、ハワイ。

年間約670万人の観光客がやってくる国際的観光地であり、軍需と並びハワイ州の経済の屋台骨と言っても過言ではない場所である。だが、人がたくさんいるはずなのに誰一人としていなかった。

「ご飯を食べようと思ったんだけど、誰もいないようですね。」

楓があたりを見渡しながら言う。蒸し暑いのだが、彼女は相変わらずゴスロリと着物が混ざったような服を着ていた。暑くないのか？と思うのだが、汗は掻いていないようだ。

「そういえば、さっきの“物質生成”だったけ。あれで食べ物を出せば良いんじゃないのか？」

「わらわの能力では、食べ物を出せません。出せるのは武器やら、乗りものやら、自分では作れない物だけなのです。」

自分で作れない物なら何でも出せるんですけど、と付け加えた。

「そんなことより、ここは、というよりこの島全体に人除けの魔法が何かが掛けられているようです。こんなことが出来るのはわらわの仲間か『守護者』と思って良いでしょう。」

「つまり、移動は最小限に抑えたほうが良いってこと？」

「その通りです、悠斗様。」

前者ならまだ良いが、後者の場合は命の危険にさらされる。日本で襲われたあんな経験はあまりしたくはないからな。

「とりあえずはあのホテルに行きましょう。」

浜辺の近くに建っているホテルを指差し、俺たちは歩き始めた。

ホテルは20階建てのものであった。

エレベーターはあったが、動いておらず、やはりホテル内にも誰一人いなかった。

中は綺麗に掃除してあることから、ここには人があまり来ていないようだ。

とりあえず、俺達の潜伏する部屋が決まった。

10階にある西側の階段から二つ目、東側の階段から四つ目の部屋、1005号室である。

鍵が掛かっていたが、楓の馬鹿力でドアは呆気なく破壊された。部屋の中は洋風な造りとなっており、テーブルやテレビ、タンスなどがあり、奥の部屋にはベッドが二つあった。

「悠斗様、疲れたでしょう。お休みになってください。」

奥の部屋に入るなり、楓は言った。

「楓の方こそ休みなよ。見張りは俺がしてるから。」

「わらわのことは気にしないでください。三日間、地下にいる間、寝てましたから大丈夫です。」

そう言くと、彼女は無言で俺の目を見てきた。

「分かったよ。お言葉に甘えさせて貰う。」

「それで良いのです。・・・悠斗様にはまだ死んでもらうわけにはいきませんから。それではお休みなさい。」

楓が部屋から出ていく。ベッドに入り、俺は眠った。

部屋から出ていった楓は暫くコの字型の椅子に座り、悠斗が寝静まるのを確認すると、廊下に出るドアのドアノブに手を掛けた。

「悠斗様」悠斗様」待っててくださいね。全部片付けておきますから。」

そして、ドアノブを捻った。

ドアが開いていく。その瞬間、中に何者かが入ろうとした。だがそれは、楓の正面に突然、出現した巨大なハンマーにより、阻まれた。ハンマーにあたり、何者かは廊下の壁にめり込む。

そいつは骨でできた仮面を付けており、足下には槍の様な武器が落ちている。

楓はそいつの姿から『守護者』であると確信した。

廊下に出ると、左右に、『守護者』が4、5体ずついた。更に東西の階段から、足音が徐々に近づいてきている。

楓はゆっくりとドアを閉め、『守護者』達を見渡す。

そして、ドアを守るように背を向け、言う。

「悠斗様が寝でいらっしゃいます。あまり騒がないでよね。」

その声は威圧感たっぷりであり、これから起こる戦いを楽しむように口が弧を描いた。

第7話「最悪の場所」(後書き)

いかがでしたか？

気軽に感想、アドバイスお書きください。

次回もお楽しみに。

第8話「守りたいもの」

「“物質生成”！！」

楓は西側にいる敵を見て言う。

彼女の能力、“物質生成”は無から有を作り出す能力である。

ただし、自分が一度見たことがある物しか作り出せず、なおかつ、自分一人では作れない物（機械などを使わずに）に限り、自分の視界にしか出現させれないという制約付きである。

「アイアン・メイデン！！」

楓が叫ぶ。すると、西側の『守護者』達の後ろに女性の形をした、高さ2メートルほどの大きさの鉄の人形が出てきた。

静かに全面が右に開いていく。

中は空洞になっており、左右に開く扉からは、長い釘が内部に向かって突き出しており、本体の背後の部分にも釘が植えられ、内部に釘の先が突き出ている。

それは俗に言う『鉄の処女』。

かつて中世ヨーロッパで刑罰や拷問に用いられたとされる拷問具である。

更に東側の『守護者』にも、同様に『鉄の処女』が出現する。

それと同時に楓が動き出した。

一瞬で西側の一番手前の『守護者』の懐に入り込み、鳩尾を殴り、相手が怯んだところに蹴りを入れた。

吹き飛ばされた『守護者』は『鉄の処女』の中に突っ込み、釘に背中から刺される。そのまま、全面が閉まっていく。

悲鳴が外に漏れない造りとなっているため、少しの沈黙が訪れる。

暫くすると、隙間から血が垂れてきた。

それを見た数体の『守護者』達が動揺し、後ずさるが、その先には『鉄の処女』があり、

「・・・ッ!!」

少しの悲鳴が上がるが、直ぐに扉が閉じ、静かになる。

そして、楓は歪な笑みを浮かべる。獲物を狙う獣のような眼をしてだが、殺意は感じられない。それはまるで、子供が欲しかった物を手に入れた時の様に、楓は純粹に喜びを感じていた。

戦いに喜びを感じる。それを人は異常というかもしれない。だが、彼女達は自分のことを人間ではないと思っており、彼女らに関わる者達もほとんど人間として扱っていなかった。

それだけで、それは異常ではなくなる。如何なる理由であろうとも否定することはできない。

そついう世界で、人間は最も近くににいるが決して踏み込めるはずのない世界で、楓達は生きているのだ。

そして、再び、楓が動き出した。

目が覚めた。

視界には真っ白い天井が広がっている。

上体を起こし、まだ眠っている頭が起きるのを待つ。

確か、俺は楓という少女に飛行機から降下させられ、船でハワイに来たんだった。

辺りを見渡すと時計が目についた。

時刻は午後5時。4時間ほど寝ていたらしい。窓からは夕焼けが見

える。

そういえば楓の姿が見当たらない。見張りをしてくれていたんだっけ。そろそろ代わった方が良いよな。そう思いベットから立ち上がる。

廊下に出るドアを目指し、進んでいく。

部屋は荒らされておらず、戦闘は起こっていないようだ。

ドアの前に着き、ドアを開けようとドアノブを動かした時だった。

「悠斗様、まだ出て来ないでください!!」

廊下から楓の声がし、外側からドアを押しているようで、ドアが開けられない。外からは時折、金属がぶつかり合う様な音が聞こえる。外では戦闘が起こっているようだ。

ふと、静かになった。ドアが押されている力も無くなり、すんなりと開いていく。

廊下を見ようとしたその時、俺の視界を遮る様に目の前に誰かが現れた。

着物を着ている少女、楓だった。彼女の顔には疲労の色が見えているものの、見た限りでは怪我などは無い。

「部屋にお戻りください。後始末はわらわがやっておきますから。」

「疲れているようだし・・・、休みなよ。」

「いえ、大丈夫です。」

頑なに断り続ける楓。相変わらず、楓が上手いこと俺の視界を遮っている。

その時、外から何かが動き出す音がした。

その瞬間、楓の表情が変わり、素早く俺を押してきた。そのせいで部屋の中に押し戻され、尻餅をついてしまう。

「いてて・・・。」

腰に手を当てながら、顔を上げると、

「・・・ッ!!」

一瞬時間が止まったような気がした。

そこには刀で貫かれていた楓の姿があった。心臓では無いが、右の肺を貫いており、刀をたどり、紅い血がポタツと床に叩きつけられていく。

「くっ・・・!!」

楓は最後の力を振り絞り、刺した主を殴り飛ばし、血を吐くと、楓の体がゆっくりと俺の胸の中に倒れてきた。

楓の顔色は悪くなり、額には脂汗が浮かんできていた。

「・・・逃げ、て・・・。」

蚊の鳴くような楓の声がした。

逃げなきゃ。頭の中にはそれだけが残り、体は外へ出たいという様に勢い良く、部屋から飛び出た。

そして、廊下には惨劇が広がっていた。

床は血で赤く染まっており、数個の鉄の人形にも、血が飛び散っていた。また、その人形の側には傷だらけの『守護者』の姿や、もはや原形を保っていない者までいる。

それは余りにもグロテスクな光景である。

吐き気が込み上げて来た。

再び振り返る。血を流している楓がいる。

頭の中に一気に言葉が駆け抜ける。

なぜ彼女が俺の視界を遮ってきたのか？

それは俺にこんな光景を見せたくなかったから。

なぜ彼女が刺されたのか？

俺を庇ったがために。

なぜ彼女は逃げてと言ったのか？

俺に生きていてもらうため。

全部、俺のせいじゃないか。なのに俺は逃げようとした。楓を置いて。

『守護者』は不死身だ。時間が経てば復活するだろう。だが、楓は傷がそう簡単に治るはずがない。なら結果は目に見えていた。楓の死という結果が。

そして、俺の中の何かが弾けた。

無造作に近くに落ちていた短剣を掴み、指先の皮膚を裂いて行く。

それと同時に回復し終えたのであろう『守護者』が数体起き上がり始めていた。

彼らの目線は部屋の中にいる楓に向かっていて。そのうちの一体が地を蹴って、部屋に入ろうとした時、スパツと体が左右に真つ二つになった。体が左右に分かれていき、その間には悠斗の姿があった。

左右10本の指からはまるで獣のように鋭い爪が生えている。どの爪も真つ赤であり、切れ味は半端なく、硬度も刀並みのものである。

「楓には指一本触れさせねえ！！」

部屋の前に仁王立ちになり、怒気を孕ませた声を上げた。

一方、ホテルの外、ハワイ島では、島を囲む様にして、動く者達があった。

ある者は戦い、ある者はホテルへ向かい、ある者は海岸に集まっている。ホテルに向かっていている面子の中に風香やアリスの姿があった。

「始まったみたいですね。」

アリスが戦闘が起こっている方を見て言う。

「向こうには、“絶対領域”のローラがいますわ。あそこは彼女達に任せて構わないでしょう。それよりも私達は悠斗を回収することに集中しますわよ。」

「うん。」

風香が頷き、移動が再開される。

暫くすると、突然異変が起こった。

バリンとガラスが割れる音が響き、風香達が顔を上げると、ホテルの窓ガラスが割れ、『守護者』らしき者が心臓を赤い針のようなもので貫かれながら落下していた。

「あれは・・・。」

「きつとゆー君だよ。早く助けにいきましょうよ。」

風香の声と共に、彼女らはホテルに駆け込んだ。

第8話「守りたいもの」(後書き)

いかがでしたか？

若干更新が遅れましたが、もう少し早く更新が出来るよう頑張ります。

次回もお楽しみに。

第9話「七柱」

「ゆー君、大丈夫!？」

辺りにいた『守護者』達を片付けた頃、階段から風香たちがやってきた。

風香やアリスのほかに見たことが無い顔ぶれもいる。

「俺は大丈夫だが、楓が……。」

俺は風香たちを部屋に連れて行き、血を流して横たわっている楓の側に駆け寄った。

「あなた、治療能力でしたわよね。楓の治療をお願いしますわ。」

アリスと一緒にやってきた、三つ編みの女の子に言う。

「分かりました。」

言われた女の子は返事をし、倒れている楓の真横に來ると、傷口に触れるか触れないかの距離まで掌を持ってきた。

すると、掌からゆっくり傷口を覆う様に光が現れた。

徐々に傷口が塞がっていき、呼吸も安定してきている。

「一応、治療をしました。楓さんには暫くは安静にしてもらったようになります。傷付いた肺は完全には回復していませんので、戦闘を行うと若干、影響がでるかもしれません。」

一安心し、俺達は本来の行き先であるニューヨーク支部へ向かった。

ニューヨーク支部に着いた俺達は、ひとまず楓を支部にあるベットに運び、俺と風香、アリス、それとミュウと呼ばれている少女の4人が支部の書斎らしき場所に集まった。

他のハワイに駆けつけた者達は、それぞれの持ち場に帰ったと言う。

「とりあえず、ゆー君を救出出来たのは良かったね。」

嬉しそうに言う風香に対し、アリスやミュウは険しい顔をしている。
「その通りなのですが、楓がやられたとなると、『七柱』^{ななちゅう}の方々は黙っていないですわね。」

「・・・面倒な事になる。」

二人の言い分にしまった、という様な風香。

「『七柱』ってのは何なんだ？」

話に全く着いていけないので質問する。

「『七柱』っていうのはね、私達の中でも特に能力の強い7人の事を指すんだよ。楓ちゃんも『七柱』の一人何だよ。」

「他には“絶対領域”のローラや私達のリーダーのアイシャを始め、後4人ほどいますわ。」

二人が説明してくれる。

「その『七柱』が何で黙っちゃいないんだ？」

「それはね、ゆー君は皆から期待されてるからだよ。唯一、『守護者』を倒せる存在、なのに『七柱』という強大な力が側にありながら、その『七柱』の楓ちゃんが重傷を負ってしまった。」

「そのことを、他の『七柱』、否、他の皆も、快く思わない、という事か？」

その通り、と風香がうんうんと頷く。

「皆は希望の星であるゆー君がこんなんで大丈夫か？って不安になっ
っているんだよ。」

「そこでその不安を取り除くべく、貴方に難しい任務かなにかを行
わせ、皆に信用してもらおうとするはずですわね。」

「まあとにかく、彼女らから何らかの指示が出るのを待つしかあり
ませんわ。」

そう言うアリスはどこか不安そうだった。

場所は移り変わりイギリスの首都、ロンドン。

その都市圏は比較的平坦な土地に広がっており、その中心部をテムズ川が西から東に流れている。公園と緑地帯の面積は市の39%にも及び、都会でありながら緑が多い地域だが、今は少し違っていた。木は倒れ、道路はどこどころ焼け跡が目立ち、ビルなどの窓ガラスは割れている。だが、人々はその光景を見ても一切驚かない。むしろ、気づいていない様だった。

それもそのはず、これは自然災害でも、人間の手によって起きたものではない。『存在しなかった者』達により起こされたのだから、人々は気づけ無い。

そんなロンドンで、一際爆炎が上がっている場所があった。外周護衛を担当する近衛兵の交代儀式を見物出来る事で有名なバッキンガム宮殿である。

壁はところどころ崩れ落ちており、その周辺には顔を骨の仮面で覆った『守護者』が倒れていたり、数名の女性が腕などに怪我を負っていた。

そんな中、唯一立ち上がっている者がいた。

火の粉舞う中、銀髪をはためかせ、右手首にのみ銀の腕輪をつけている。身に付けている真っ白なドレスには返り血一つついておらず、時折、揺れるスカートからは美脚が見え隠れしている。

また、ドレスの上からでも分かるほど大きな胸の持ち主である。

「粗方、片付いたようねえ。アイシャ。相変わらずのその反則的な強さは何？」

そんな彼女の背後から、声がした。彼女が振り返り、その瞳に移ったのは、拘束服に身を包んだ金髪の少女だった。見た目は中学生ぐらいである。

真紅の瞳を持つ彼女の服のいたるところにポケットがあり、そこからナイフやらノコギリやらクナイやら、ハンマーなどの彼女には似合わない物騒なものが見えている。

これだけでも辺なのに極め付けに背中にはチェーンソーを背負っている恐ろしい少女である。

「お久しぶりですねえ。ルチアちゃん。いつ頃、ここに来たのですか？」

「いつ私がここに来たっていいでしょつ。」

のほほんとした声に、少々苛立ちが込められた声が返される。だが、アイシヤはそんなことを気にする様子もなくにこやかな笑みを浮かべている。

「そんなことよりも、楓がやられたことは知っているの？」
ルチアは真剣な表状になり、言う。

「あ、あの例の悠斗さん、ですよねえ。」

「ええ、そうよ。正直なところ、彼を余り信用できないのよ。仲間達や私も含めてね。ですが、彼には『守護者』の抹殺をやってもらわねばならない。そこで彼には信用を取り戻すために一仕事やってもらっわよ。」

「なら私も行かないといけませんよねえ？じゃあ参りましょうかあ？」

手をヒラヒラと振りながら歩き始めるが、

「アイシヤ、そっちは逆方向よ。」

出だし早々間違えるのだった。

少し時間が経ち、ロンドンにあるギルトの本部。現在は『守護者』による結界の破壊によって戦争の真っ只中に置かれ、おまけに周囲の人間達に存在を知られてしまっている。

おかげで、野次馬達が門に集まっては騒いでいる。
そんな騒ぎの中、内部では恐ろしいほど静かだった。ある一室を除いて。

「アイシャ様は、まだ来ないんすか？もう待ちくたびれたつす。」
部屋のテーブルに不良のように足を乗せたベリーショートでボーイツシユな高校生ぐらいの背の女性が言った。

目は少し釣り上がっており、活発そうなイメージである。

「もう少し待ちなさい。ジュン。アイシャさんが来ないのは、それなりに忙しいからです。それにこのくらいのこと神は許してくれるでしょう。全ては神の思し召しのままに。」

修道女シスターの格好をした、女性が分厚い聖書に目を通しながら言った。
首から十字架の形をしたアクセサリをぶら下げている。

「トスカナの言う通りだとリリスは思うなあ」ジュンはアイシャ姉、
LOVE過ぎるんだよ。ねえ、ポンちゃん」

修道女の言い分に重なる様に、小学生低学年ぐらいの長い赤髪を2つに分けている少女が言った。白いワンピースを着ている。

「お前みたいなちびっ子にアイシャ様とのことをいちいち言われたく無いね。それにお前だつていちゃついてんじゃねえか!!」

ジュンの指差す先には、骨の仮面をつけた男、つまりは『守護者』
に抱きついてしているリリスがいた。

しかし、『守護者』は攻撃するどころか嫌がりもせず、彼女の頭を撫でている。

「リリスとポンちゃんはねえ、相思相愛だから良いの。でもジュンは片想いでしょ？」

ジュンの反論にリリスが毒舌を吐く。その言葉でジュンは魂が抜け

落ちた様に何も喋らなくなった。

そんな中、ギギイーと扉が開き、ジュンの表状が明るくなった。
そこから現れたのは『七柱』の一人、ルチアと彼女達のリーダーで
あり、この部屋に集まった者達と同じ『七柱』の一人、アイシャだ
った。

第9話「七柱」(後書き)

いかがでしたか？

気軽に感想、アドバイスをお書きください。

次回もお楽しみに。

第10話「クリス」

「アイシャ様！お待ちしてたつす。」

ジュンが満面の笑みを浮かべ、アイシャに近づいていく。

「お久しぶりですね。ジュンさん。」

ぺこりとお辞儀をするアイシャ。その後、室内を見渡し、

「みなさんもお久しぶりですね。トスカナさん、リリスさん。あらあら、ローラさんの姿が見えませんかねえ。」

再びお辞儀をした後、部屋の四隅を見て、困った顔になり言った。

「ローラのヤツならきてないつす。まあ、話し合いにおいては、いてもいなくても変わらないつすよ。部屋の隅に言つて死にたい、死にたい言つてる根暗さんつすからね。」

肩をすくめて言い放つジュン。

「そういう言い方はあまりよくないよ。ローラは私達にとって重要な戦力なんだから。」

「それに、ローラさんにはローラさんなりの事情があるのでしょう。そんな彼女を神は許してくれるでしょう。それに彼女の言動にはそれなりの理由があるのですし……。」

そんなジュンの言葉を聞き、ルチアとトスカナの2人がローラを弁護していた。

そんな様子を見ていたリリスはクスクスと笑いながら、

「ジュンが怒られたあー」怒られたあー」クスクス。」

と言い、ジュンの顔がみるみる怒りの形相になっていく。

「てめえ、リリス。ブチ殺されてえんすか！？てか、ブチ殺されたいようつすね。」

「リリスと戦うっていうのぉ？ジュン負けちゃうよぉ。だってリリスとポンちゃんの方が強いからねえ。」

「はい、落ちついてえ。喧嘩は駄目ですよ。」

ヒートアップするジンを落ち着かせようとアイシャが2人の間に入り、制止する。

「アイシャ様がそう言うなら・・・。」

「はい。分かりました。」

渋々といった感じのジンとニコニコ笑顔で右手を上げて答えるリス。

「そろそろ本題に入るべきだと思うんだけど・・・。」

そんな様子を遠めで見ていたルチャがアイシャに耳打ちした。

「そうでした。そうでした。」

素晴らしいながら、席に着くアイシャと共にルチャや立ち上がっていたジンも席についていく。

「今回は皆さんもご存知の、悠斗さんについてです。一応悠斗さんは、ローラさんや風香さん達によって、無事保護されたようですけど、楓さんが・・・。」

「楓が重症を負ったのよ。」

アイシャの説明にルチャが付け加える。そのことを聞いても特に3人の表情に変化は無かった。

「・・・で、今回の件で悠斗とかいうやつ処分を決めると言うことですよ、アイシャ様？」

「その通りです。まあ、処分というか、信頼を取り戻してもらったための一仕事というか、とにかく何かしてもらわないとお。」

のほほんとした声を出しながら皆の顔を伺うアイシャ。

「一仕事つすか・・・。」

腕を組んで考えるジン。

「特に意見は無いです。」

分厚い聖書に目を通しながら無愛想に答えるトスカナ。

「リリースもお。悠斗って人には興味ないし。」

「……。」

ポンちゃんと遊びながら興味なさげに言うリリース。

そんな3人の顔色が一気に青ざめた。

彼女らの喉もとにはのこぎりやらナイフやら、クナイやらがギリギリのところまで近づいていた。

少しでも動けば喉を裂いてしまうだろう。

だが、その光景は少し異様だった。それらの武器は宙に浮いていたのだ。

「さつさと考えなさい。じゃないと、喉を引き裂くわよ。」

席に座っているルチアが、キツと3人を睨みつけながら、怒気を含んだ声を静かに言った。

アイシヤは苦笑いを浮かべながらその光景を見ている。

「……な、ならクリスの護衛なんてどう？」

やっとの思いで振り絞ったのであろうリリースが必死に喉の奥から声を出した。

「それは良い提案ね。アイシヤ、それでいい？」

「良いですよ。丁度、『七柱』が本部に集まっていたので、クリスさんを迎えにいけなかったのですよ。これから『守護者』の迎撃もありますし。ここは悠斗さんに任せましょうか。」

アイシヤの言葉にその場の全員が納得した。

「……という訳なので、クリスさんを本部に連れてきてくださいね。」

風香達の基本的な能力の一つである連絡方法でアイシヤという女性から仕事を任された俺。

「それで、クリスってのはどんな奴なんだ？」

「クリスさんは結界士なんだよ。本部や支部に張ってある結界を唯

「、作れる人だよ。」

そんなクリスについての話を聞きながら、俺達はクリスがいるというカリフォルニアへ向かった。

カリフォルニア州に着き、クリスがいるという家を目指し、歩いていく。すれ違うのは人ばかりで、さすがは合衆国の州のうちでは最大の人口を誇っているだけのことはある。

空にはまばゆい太陽が輝いており、非常に乾燥している。

歩き続けると人通りの少ない場所に一つ、テントが張ってあった。

そのテントにアリスが入っていき、5分ほどするとアリスと髪をまあなんとというか、アニメのキャラクターにいそうなショッキングピンクに染めている女性が出てきた。

髪を風香と同じポニーテールにしており、少し垂れ目な感じから大人しそうに見える。

「クリスさん、あちらにるのが貴方の護衛をする風香と悠斗ですわ。」

少女の隣に立ち、アリスが紹介している。

彼女が俺たちの護衛の相手か。改めて見ていると俺の視線に気づいたのか、キツと睨まれた。全然、怖くないのだが。

「もう一人、連れが来るそうなので、その方が来しだいここを出発しますわよ。」

アリスがそう告げた。暫くすると、一人の女性が現れた。

褐色の肌に金髪の30代ぐらいの女性である。

執事服を着ており、スレンダーなモデル体型である。左手首には銀の腕輪をつけている。

「遅れて申し訳ありません。私はクリスさんのボディーガードわたくしをしております、ミステイ・フリーユゲルと申します。以後、お見知りおきを。」

彼女はそう言って、お辞儀をした。

第10話「クリス」（後書き）

いかがでしたか？

気軽に感想、アドバイスをお書きください。

次回もお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2574n/>

俺が知らないこの世界

2010年10月18日11時31分発行